地理学教室、そのころのこと

岩田慶治

そのころ、私はカール・リッターに熱中していた。学会発表を目前にしていたこともあるが、いくら考えても名案がでるわけもなく、繰り返し、難解きわまるかれの本を読んでは頭をかかえるばかりであった。ヴェルヒェスとかヴェルヒェンといった関係代名詞の頻発する本にホトホト疲れ果てて、二日も三日も同じところで足踏みをするばかりであった。

略図や概念図をつくって説明するというわけにもいかず、夢うつつのなかに話をはじめ、話を終った。

発表がすんで階下の小部屋にもどってみると、そこに大阪市大の村松先生が待っておられた。先生は私の転出をうながされたのである。立命館から大阪市大へ、同じ地理学教室であったが私にとっては新しい展望がひらけるような思いがした。通勤に時間がかかったが、当時は若かったから何事もでもなかった。

京都のわが家から市バスで京都駅にいたり、国電に乗りかえて大阪駅につく。あるいは阪急電車にのり、京阪電車に乗りかえ、さらに環状線や地下鉄に乗りかえ、最後に阪和線にのって杉本町につく。この間、およそ二時間。大学で話をするのは週二、三回だったから、合計すれば電車に乗っている時間の方がずっと多かったかもしれない。

当時、大阪市大の地理学教室には村松繁樹先生を中心に川喜田二郎、君塚進、木村宏さんが居られ、後れて渡辺久雄、薮内芳彦、春日茂男さんが着任された。今からふり返ってみると、日本の地理学界の一中心だったといってもよいだろう。一大中心とは言えないにしても、一小中心ではなかった。文献による地理学から地域の実地調査にもとづく地理学へ、それがあたりまえに違いないのだが、当時の地理学界はその曲がり角にあった。やや遅れて農村から都市へという研究の流れも及んできたといってもよいだろう。

研究は研究として、当時は市大の草創期—第二のというべきか—であったから、大学が分散していて統一がなく、われわれは右往左往しないわけにはいかなかった。最初は道仁学舎というのが中心だったが、そこは地下鉄の心斎橋から十分足らずのところで、もとの小学校跡を利用したものだった。都心のもっとも便利なところに位置していたわけで、コーヒー店などを利用するにはとても便利だったが、教室の設備などはないにひとしく、昼休みに屋上にのぼって休息するにしても古い長椅子のクッションが濡れたまま半ば朽ち、そこに野草などが生えていて、その傍にならんで坐っていたのである。戦いに敗れたしるしが哀れだった。近くの街中からは釘を打つ音が聞こえてきて、しばらくその音に聞き入っていることもあった。明治校舎に移ってからのことは、短期間でもあり忘れたことが多いがいつも福川圭子さんが出席していたことが忘れられない。

それにしても、当時一番困ったのは給料の遅配ということであった。当日になってから今月の給料は五日遅れます。一週間遅れますなどと事務から申し渡されると本当に困ってしまった。もちろん、

京都、大阪間は定期券を買っていたが、そういうときに限って金がなく、四条大宮からわが家まで歩いて帰ったこともあった。一、二度だけであったが―。

そこで、本題にもどると私が最初に通うことになったのは道仁校舎で、教室はその二階にあった。小教室で、十人前後の学生が一緒にいたが、今、前後不同に思い出すと、高山龍三さん、杉本尚次さん、山岸和一郎さん、庄ノ文男さん、などの顔が思い出される。庄ノさんは年齢の上では私より年上であったが、たいへんな勉強家であった。杉本さんはすでに民家の研究家として厖大な知識と経験をつんでいた。写真についてはプロ級で、いつも―今は知らないが―ライカを持って歩きまわり、電車やバスの路線をくまなくめぐり歩いて民家の写真をとっていた。

私といえばそのころは地理学から文化人類学へ転身しようとしていた。だから、初めの一年間の講義といえばファースの「ニュージーランド・マオリの原始経済」を克明に読むことだった。来る日も来る日もマオリの話だったから、聞き手にとっては退屈だったかもしれない。でも、あの本は視野がひろく、周到に考えられていて、とてもよい本だと思った。図表などはガリ版を切ってコピーした。

こういう風に思い出していては回想がつきないから、地理学の本道にもどろう。

そのころは新しい地理学への転換の時期で、さまざまな分析の仕方が工夫されようとしていた。私もその流れを日本という僻地から遠望していたわけで、とくに地域論、ないし文化地域については、ウィスラー、クローバー、スチュワートの考えを跡づけ、そのさきにゲームの理論を位置づけようとしていた。フォン・ノイマンとモルゲンシュテルンの「Theory of games…」などという厚い本を買ったものの、むずかしくてまったく歯が立たなかった。私にはクラックホーンやマードックの「文化の普遍的要素・・・」程度がよい刺激になった。マリノフスキーの本も好きで、翻訳される前だったから、考え考えしながら繰りかえし読んだ。とても明快でわかりやすかったが彼の機能主義の中心に位置しているニーズとサティスファクションという思考軸には、今日でも納得し切れない。果して人類文化は欲求とその満足という軸にそって構築されているだろうか。ニーズというのは仏教風に言えば「煩悩」と同じことではないか。

そこにあるのは煩悩じゃなく「願い」、「願望」、またはあこがれではなかろうか。「衆生無辺誓願度」はニーズの満足とは違うだろうと思っているが、何事にもよらず出発点は単純なことで、その単純なことの直観と発見が言葉ほどやさしくないのである。

当時が人文地理学における地域調査の興隆期だったことはよく知られている。われわれも村松先生の先導でそれを行うことになり、歴史の古い奈良盆地の村、比較的新しい開拓村のおもかげをとどめている富山県砺波平野の村、および古風な家族制度の残っているらしい庄川上流の山村をえらび、それぞれに何度かの調査をくりかえした。ただし、この問題についてはついては報告書もあり、何人かの友人が触れているので繰り返さない。われわれは新しい地理学をつくり出そうと熱中していたのである。

庄川流域の村を調査する頃から、相前後して、われわれのメンバーはそれぞれ海外調査にでかけることになった。つまり、日本の村落研究に一応のピリオドが打たれることになったわけである。

川喜田さんがネパールに出かけ、私が東南アジアに向い、薮内さんがトンガに出かけた。国内の調査から海外への調査へ、この流れは人は変ったが絶えることなく今日に連続している。地理学といったり、人文地理学といったり、人類学、文化人類学といったり、用語、レッテル、あるいは呼び名は

その都度変っても、その内容は大同小異というか、同じであった。

あるときは文化人類学が脚光をあび、あるときは地理学、地誌学が地下水のように調査を支えたが、このごろはそれが再び地表に出てくる気配がする。土地・人間とのかかわりにおいて、あるときは人間、社会の方に注目があつまり、あるときは土地、場所、または人間活動の土台に視線があつまる。地域というものは多面体で、厚み、あるいは深さをもっていたのである。そして今は、社会、民族の重要性はかわらないものの、むしろ、それらの土台あるいは深層としての土地の側、つまり地理学に回帰すべきときではないかと思っている。同じ地域の二つの側面なのだから一方だけということはないのだけれども—。

結局、いろいろの理屈はつけるけれども、地理学が好きでそこから—その見方から—離れられないわけである。

私にとって二十年間の市大時代はシュトゥルム・ウント・ドラングの時代だった。疾風怒涛の時代、あるいは右往左往の時代。

（旧教員）

シンガポールの郊外ニュータウン（1983年　小林博）

シンガポールの再開発された都心部の中国人街（1983年　小林博）